集落行事に対する満足度とその規定要因の構造

星 野 敏*

The Satisfaction Level for Communal Events in a Rural Community and its Prescribing Factors

Satoshi Hoshino* (Okayama University)

The level of satisfaction for communal events in rural communities is one of the most important factors influencing the inhabitants' wishes for permanent settlement. The renewal of the communal events has been a crucial problem in the field of the rural life improvements. In this paper, the author estimated the degree of satisfaction for the communal events based on the questionnaire survey and identified the factors that have greatly influenced on the satisfaction level of the inhabitants. He also elaborated the relationships among the factors and made clear the mechanisms that prescribed the satisfaction of the inhabitants. Both the mechanism on competitions between the communal events and personal business and the mechanism on the acquisition of manners of social relationships in the

rural community determined the satisfaction degree for the communal events. He also pointed out the following points in case of the event renewal.

- 1) The increase of engagements to permanent jobs, the increase of nuclear family and the decline of agriculture would enlarge the dissatisfaction for the communal events.
- 2) It must be taken into consideration that the communal events should not be abolished but be improved while maintaining the participation rate to the events.
- 3) For the inhabitants in their 30'S and 40's, their personal business extremely competes with the communal events. Therefore their burdens must be carefully reduced in case of the event renewal.

1. はじめに

定住意向は地域の生活環境を包括的に把握するメルクマールとしてきわめて重要な指標であり、地域計画、とりわけ市町村総合計画に付随したアンケート調査の必須的な項目となっている。しかし、研究レベルで定住意向とその規定要因の解明に正面から取り組んだものは必ずしも多くない。従来の研究においては、過疎化、混住化、離農、村落移転といった社会移動をテーマとする研究の中で論じられてきた。

二宮哲雄・橋本和幸¹⁾は、混住化社会や農村(島)社会を対象にして社会構造や住民意識を調査しているが、この中で定住意向と関連するものを挙げると次の通りである。西村雄郎は、混住化地区の住民を定住意欲の異なる土着層、定着層、流動層に分けて、町の行

政政や町内会活動に対する態度を比較し、「定着志向性」の強弱が住民のコミュニティ参加の態様を規定していることを検証した²⁾。一方、石川県能登島町の調査を踏まえて、三上勝也³⁾は、家規範の形骸化によって定住志向が弱まったという仮説に基づき、世帯主の家意識(家の継承・家長権・家柄の優先に対する意識)と定住志向との関係を分析している。ただし、両者の間にはゆるやかな関連性を認めうるものの、明瞭な対応関係の析出までは成功していない。同調査において石原多賀子⁴⁾は生活観(地域生活や家族生活に対する住民の選好)と定住志向・住みよさとの関連性を分析している。また、集落移転や山村問題などの研究⁵⁾においても、定住意向とその関係指標との断片的な分析がみられる。

上記の既存研究において、本稿のように定住意向と集落行事・慣習の満足度との関連性に着目した図式はみられない。しかしながら、集落行事や生活慣習に対

* 岡山大学農学部

する満足度は、本文で後述するように定住意向⁶⁾を左右する（すくなくとも無視できない）重要な要因の一つである。今日、農村地域といえども、住民は社会的・経済的に独立した存在であり、集落行事や慣習への参加・協力に際して、以前のような強制力は大きく弱まっている。しかしながら、依然として自由に断りづらい状況は残っている。しかも、宗教祭事の場合には、故事にちなんで日付が固定されていることも多いので、平日に仕事を休んでまで集落行事・慣習に参加しなければならない場合もある。このため、農村地域の住民、とくに恒常的勤務に従事する層から、集落行事に対する不満の声がしばしば聞かれるのである。ただし、集落行事・慣習を一概にネガティブなものと決めつけることは正しくないであろう。集落行事への参加や生活慣習の遵守は、集落に定住するための作法を獲得し、それを継承することでもある。また、集落行事は参加者にそれなりの充足感をもたらすことも確かであろうし、その反復過程で定住メンバーとしての帰属意識が強化されるであろう。

農村地域の定住意向を強化するためにも、「集落行事の再生を図る」ことは農村生活改善の今日的課題である。このような集落行事の見直しにあたっては、住民の満足度（不満度）が如何なる要因に規定されているかを明らかにする必要がある。そこで、本稿ではアンケート調査によって集落の慣行行事に対する地区住民の満足度を把握し、それを規定する要因の構造を明らかにする。更に、かかる要因構造が継続することを仮定した上で、集落行事の今後について展望する。

ところで、既往の研究では、アンケート調査の単位がいずれも世帯主（家）である点が共通している。対象を世帯主に限定した「農家調査」は、イエ・ムラ理論の枠組みとの親和性という点では支持されるが、個人の属性と意識や行動との関連性の全体像を明らかにするためにはきわめて偏ったサンプル集団を提供すると言わざるを得ない。そこで、本稿では、世帯単位ではなくて18歳以上の個人全員を調査対象とした。この点は本稿の調査手法上の大きな特徴である。

2. 分析の枠組み

図1に本稿の分析の枠組みを示した。分析1では、定住意向と集落行事に対する満足度の関連を明らかにする。分析2では、集落行事に対する満足度とその要因の関連を明らかにする。

分析にあたり、A 定住意向、B 生活のゆとりに関する評価項目、C 集落行事に対する満足度関連項目

図1. 分析の枠組み

（行事評価項目と呼ぶ）、D 住民の個人的属性、E 行事評価を規定する要因（規定要因と呼ぶ）の項目群を設定した。各項目群の内容は以下の通りである。

A. 住民の定住意向（1項目）

定住意向は、「住民が当該地区に住み続けたいという意向をどの程度もっているか」という主観の評価である。定住意向は、居住環境、消費生活、就業機会、教育・文化へのアクセス、医療・福祉へのアクセス、余暇の享受、交流の程度などに関わる「生活全般の質」に対する住民の総合的評価⁷⁾である。

B. 生活のゆとりに関する評価項目（3項目）

生活のゆとりを、経済的・精神的・時間的ゆとりの3側面から評価した。生活のゆとり項目は、定住意向と同様、生活に関するある種の主観的评价であるとともに、定住意向を左右する要因としてとらえることができる。

C. 集落行事に対する評価項目（3項目）

集落行事に対する満足度に加えて、行事の煩わしさの程度、行事の展開方向という2項目を追加した。行事の展開方向は、集落行事の充実化、現状維持、簡素化のどの方向を希望するかを問う設問であり、事実上、簡素化の要望を聞いたものである。

D. 住民の個人的属性項目（14項目）

集落行事に対する満足度は、個人的属性によって異なることが予想される。本分析では、性別、年齢、職業（8カテゴリ）、家族員数、世帯類型、地域組織の役員・構成員の経験（現、元）⁸⁾を個人的属性とした。なお、複数選択を許した職業項目はカテゴリ毎に別項目となる。

E. 行事評価の規定要因

個人的属性（D）と集落行事評価（C）の関連性から、ある程度、行事評価を規定する要因について推察することができる。しかし、属性自体が満足度を直接

規定するのではなく、個人的属性と満足度の間を取り持つ要因、つまり、行事満足度に対しては原因的要因となり、個人的属性に対しては結果的要因となる媒介項が存在すると考えられる。これを「行事評価の規定要因」と呼ぶことにする。本分析では、行事評価の規定要因として以下の2つの項目群を設定した。

・E1 集落行事と個人的用件の競合（3項目）

これは集落行事と個人的用件の「競合」に関わる項目群である。ところで、個人的用件と集落行事が重なっても、個人が自らの用件を最優先している限り、両者の「競合」は生じない。また、個人が自由に時間の調整をつけられるならば、「競合」を回避することも容易である。したがって、競合頻度、休暇の自由度、優先する用件（個人用件と集落行事のどちらを競合するか）の3項目を設定した。

・E2 集落行事の作法に関する認識（3項目）

これは集落内の行事や生活慣習の認識に関わる項目群である。行事の由来や慣習のマナーに関する知識は、集落行事に対する理解を深める作用があると考えられる。このような集落内のお付き合いの知識（作法）は、家庭内あるいは集落内の年長者から獲得すると考えられる。そこで、親子の対話、世代間のコミュニケーションの程度もあわせて把握した。これらはそれぞれ家庭レベル、および地域（集落）レベルでのコミュニケーションに対応する。なお、集落行事から得られる直接的な効用（充足感、やり甲斐、誇りなど）は行事評価項目（C）と内容が重複するので採用していない。

1) 定住意向との関連（分析1）

分析1では、集落行事に対する満足度がどの程度住民の定住意向と連動しているかを明らかにする（C→A）。また、集落行事の満足度と定住意向との関連度の大きさを生活のゆとりの評価と定住意向との関連度（B→A）の大きさと比較することにより、集落行事に対する満足度が定住意識を左右する重要な要因のひとつであることを検証する。ところで、集落行事に対する満足度は、生活のゆとり評価にも影響すると考えられる。そこで、両者の関連性（C→B）もあわせて検討する（5節）。

2) 個人的属性・規定要因との関連（分析2）

分析2では、集落行事の満足度と個人的属性および規定要因との関連性を明らかにする。まず、行事評価3項目間の相互関連性（C内部）および行事評価項目と個人的属性との関連性（D→C）を検討する（6節）。

次に行事評価項目とその規定要因との関連性（E→

C）、規定要因と個人的属性の関連性（D→E）、規定要因相互の関連性（E内部）を明らかにして、これらを構造化する（7節）。

最後に、上記の要因構造を前提に、予想される属性の将来変化から集落行事のあり方を考察する（第8節）。

3. 対象地域の概要と集落行事の実態

(1) 対象地域の概要

対象地域のN集落は、神戸市北区の北西に位置している。市街地を結ぶトンネルと道路が整備されたおかげでJR新神戸駅まで車で30～40分程度に短縮され、車による通勤が十分可能である。

総面積182ha、総世帯数53戸（1998年、データの年次は以下同じ）、総人口219人の小さな集落である。65歳以上の高齢化率は25%である。全域が都市計画の市街化調整区域に指定されている。農家数は42戸（農家率79%）、農家人口201人（92%）である。非農家は大半が分家による新家であり、混住化は進んでいない。農地面積は37ha（農地面積率20%）で土地利用の大半は山林・原野およびゴルフ場である。景観的にみても丘陵に棚田の広がる静かな純農村地域である。

集落の農業生産についてみると、酒米（「山田錦」）、「キク」、「花ハス」などの作目があるが、大半の農家は酒米を含む水稲作を営んでいる。圃場整備事業が進みつつあり、平成10年度に実施設計を終えて、平成13年から工事が着工される予定である。

(2) 集落行事

宗教関連の主な行事をあげると、お宮のお祭、神楽獅子の奉納、地藏盆、夏祭り、伊勢講（伊勢信仰を由来とする年4回の食事会）などである。集落内に5つの寺院（無人寺を含む）、と3つの神社（お宮）があり、檀家、氏子がそれぞれの寺、神社に分散しているため、全体として行事数が多く、参加者が少ない行事が多くある。また、ほとんどの行事日程が日付で固定されている。

また、宗教性のない集落行事も多い。ため池・用排水路および道路・河川の維持管理（関係者全員が平等に出役し、出不足金や労賃はない）PTAの活動（小学校のPTA行事を支援する）、ふれあい食事会などのボランティア活動（ボランティアが一人暮らしの老人を市の福祉施設に招いて食事を提供する）、公会堂の清掃（自治会の委託を受けて婦人会が公会堂内部の清掃を月1回実施している）などである。

表1. 回答者の属性

属性	カテゴリー	件数	%	属性	カテゴリー	件数	%
性別	男性	80	51.3	世帯員数	1人	3	1.9
	女性	74	47.4		2人	19	12.2
	不明	2	1.3		3人	21	13.5
	サンプル数	156	100.0		4人	22	14.1
年齢階層	18歳～30歳	30	19.2		5人	23	14.7
	31歳～40歳	13	8.3		6人	53	34.0
	41歳～50歳	27	17.3		サンプル数	156	100.0
	51歳～60歳	29	18.6	職業*	恒常的な勤務	35	22.4
	61歳～74歳	31	19.9		自営業・職人	22	14.1
	75歳以上	26	16.7		家事・育児	25	16.0
	サンプル数	156	100.0		非恒常的な仕事	15	9.6
世帯類型	夫婦・単身	17	10.9		農業	66	42.3
	夫婦と子供	36	23.1		学生	3	1.9
	2世代以上	77	49.4		その他	6	3.8
	その他	13	8.3		従事なし（無職）	19	12.2
	不明	13	8.3		不明	10	6.4
	サンプル数	156	100.0		サンプル数	156	—

注）*印：職業項目のみ複数回答を許す。重複回答比は1.3（＝191/（156－10））。

4. 調査の方法と回答者の概要

(1) 意向調査の方法

18歳以上の個人全員を調査対象とした住民意向調査を1999年4月に行った。調査票は無記名とし、集落の役員を通じて配布・回収を行うが、調査票を封筒に入

れて回収し、回答者の匿名性を確保した⁹⁾。総配布数176件、回答者数は156件、回収率は90％であった。

(2) 回答者の属性

表1は回答者の個人的属性の集計結果である。男女比率は1：1、年齢構成はおおむね均等であった。半数の世帯が2世代以上の同居世帯に属している。家族

表2. 集落行事に対する満足度・生活のゆとり3項目と定住意向の関連性

		定住意向				合 計		属性相関係数* Somers の d (Cramer の V)
		ずっと住み 続けたい	どちらとも 言えない	できることな ら移動したい		度数	(%)	
集落行事に対 する満足度	満足している	43	87.8	6	12.2		49	100.0
	どちらともいえない	24	54.5	14	31.8	6	13.6	44
	満足していない	8	33.3	10	41.7	6	25.0	24
	合計	75	64.1	30	25.6	12	10.3	117
精神的ゆとり	かなりある	52	73.2	12	16.9	7	9.9	71
	あまりない	18	47.4	16	42.1	4	10.5	38
	ほとんどない	8	47.1	6	35.3	3	17.6	17
	合計	78	61.9	34	27.0	14	11.1	126
経済的ゆとり	かなりある	44	73.3	10	16.7	6	10.0	60
	あまりない	22	51.2	18	41.9	3	7.0	43
	ほとんどない	12	52.2	7	30.4	4	17.4	23
	合計	78	61.9	35	27.8	13	10.3	126
時間的ゆとり	かなりある	47	73.4	8	12.5	9	14.1	64
	あまりない	21	53.8	15	38.5	3	7.7	39
	ほとんどない	10	37.0	15	55.6	2	7.4	27
	合計	78	60.0	38	29.2	14	10.8	130

注）*印はSomers の d：順序属性変数間の相関関係の強度を示す係数（範囲は [-1, +1]）。表中には定住意向を従属変数とした場合の数値を提示した。Cramer の V：純粋属性変数間の相関関係の強度を示す係数（範囲は [0, 1]）。なお、**印は有意水準が5％以内、***印は1％以内を示す。

員数でみても、5人以上という回答が半分ある。約4割が何らかの形で農業に従事している。また、おおむね1世帯あたり平均1名程度、サラリーマン・自営業・職人などの恒常的な仕事に就いている。

5. 定住意向との関連

本節は分析1の結果に相当する。表2は、定住意向(A)と集落行事に対する満足度(Cの1項目)および生活のゆとり3項目(B)との関連性を示している。これらの4項目は定住意向と明確な対応関係が認められる。それぞれの変数のカテゴリは順序属性を示しているので、生活のゆとりと定住意向との関連強度をSomersのd係数¹⁰⁾を用いて比較したところ、次式のような関係になった。

経済的ゆとり (0.167) < 時間的ゆとり (0.199)

< 精神的ゆとり (0.213)

生活のゆとりに関する3指標はいずれも基本的に定住意向と正の相関がみられたが、経済的な側面よりも精神的・時間的な側面とより強く関連していた。経済的なゆとりとの相関が低かった理由は、本地区が神戸市の通勤圏内にあり、すでに兼業機会に十分恵まれているためと推察される。

一方、集落行事に対する満足度は、個人とコミュニティとの関わり合いに対する主観的評価と考えられる。集落行事の満足度→定住意向についてのSomersのd係数は0.382であり、生活のゆとり3項目の数

表3. 集落行事評価3項目間のCramerのV係数

	満足度	煩わしさ
行事に対する煩わしさ	V=0.479 (0.00)	—
集落行事の見直し要望	V=0.329 (0.00)	V=0.360 (0.00)

値を大きく上回っていた。しかも、これらの項目を強引に定量的な説明変数として扱い、定住意向を目的変数とする回帰分析を行ったところ、集落行事に対する満足度だけが有意な説明変数として選択された¹¹⁾。

集落行事に対する満足度と生活のゆとり3項目との関連性を同じくSomersのd係数で比較したところ、次式のように集落行事への満足度は時間的なゆとりに対してもっとも強く関連していた。

精神的ゆとり (0.256) ≧ 経済的ゆとり (0.262)

< 時間的ゆとり (0.315)

以上のように、集落行事に対する満足度は定住意識や生活のゆとりと強く関連しており、定住意向を向上させる上できわめて重要な要因であると言える。

6. 個人的属性要因との直接的関連

本節および次節は分析2の結果に相当する。

(1) 集落行事評価3項目の相互関連

行事評価3項目(C)間のCramerのV係数は表3に示すとおりである¹²⁾。3項目間には強い関連性があり、おおむね一体的なものであった。集落行事に対する満足度が高くなれば、行事に対する煩わしさの強度

表4. 個人的属性と行事評価3項目の関連性 (CramerのV¹⁾)

	集落行事に対する満足度	集落行事に対する煩わしさ	集落行事の見直し要望
①性別	×	×	×
②年齢	V=0.391 (0.00)	V=0.292 (0.01)	V=0.284 (0.01)
③職業：			
恒常的な勤務	×	×	×
自営業・職人	×	×	×
家事・育児	×	×	×
非恒常的な仕事	×	×	×
農業	V=0.250 (0.03)	V=0.215 (0.10)	×
学生 ²⁾	—	—	—
その他 ²⁾	—	—	—
無職	×	V=0.253 (0.03)	×
④家族員数	×	×	×
⑤世帯類型	×	×	× ³⁾
⑥現役員・構成員	×	V=0.346 (0.00)	×
⑦元役員・構成員	×	V=0.274 (0.02)	×

注：1) 表中かっこ内の数値は有意水準を示す。また、有意水準が10%をクリアできないものは×印とした。

2) 職業カテゴリのうち、学生とその他は該当サンプル数が少ないので分析から除外した。

3) 世帯類型のカテゴリは、「夫婦・単身」、「夫婦と子供」、「2世代以上」、「その他」の4カテゴリである。このうち、「その他」カテゴリを除外して計算した場合には、有意な関連性は見られなかった。

表5．集落行事に対する満足度と年齢・農業従事者のクロス集計

		集落行事に対する満足度							
		満足している		どちらともいえない		満足していない		合 計	
		度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
年齢	18歳－29歳	6	31.6	8	42.1	5	26.3	19	100
	30歳代	2	16.7	6	50.0	4	33.3	12	100
	40歳代	5	21.7	8	34.8	10	43.5	23	100
	50歳代	9	36.0	11	44.0	5	20.0	25	100
	60歳－74歳	11	50.0	10	45.5	1	4.5	22	100
	75歳以上	17	94.4	1	5.6	0	0.0	18	100
	合計	50	42.0	44	37.0	25	21.0	119	100
農業	従事する	31	55.4	16	28.6	9	16.1	56	100
	従事しない	19	30.6	27	43.5	16	25.8	62	100
	合計	50	42.4	43	36.4	25	21.2	118	100

と見直し要望の強度がともに低下する傾向が確認できた。また、行事に対する煩わしさは、満足度と特に関連が強かった ($V=0.479$)。

(2) 個人的属性と集落行事評価の直接的な関連

個人的属性と集落行事評価の関連性を知るために、個人的属性 (D の14項目) と行事評価3項目について総当たりのクロス集計をかけた。表4はその結果を示したものである。

集落行事に対する満足度と統計的に有意な関連があった属性項目は、年齢と農業従事者の2項目だけであった。表5は集落行事の満足度と年齢および農業従事者のクロス集計結果である。年齢別でみると、60歳以上の階層で満足度が高く、30歳代と40歳代で満足度が低い。仕事と家庭生活の両面で「働き盛り」の年代でもっとも満足度が低い点は興味深い。また、農業に従事している回答者の満足度は相対的に高かった。

集落行事に対する煩わしき評価と関連があった属性項目は、年齢、農業、無職、現役員・構成員、元役員・構成員であった (集計表は割愛)。農業従事者および無職は、煩わしきを感じる割合が少なかった。また、現役員・構成員、元役員・構成員はともに煩わしさを強く感じていたが、この点については8節 (2) 項で改めて検討する。

見直し要望と関連のあった属性項目は、年齢と家族構成であったが、家族構成のクロス集計をチェックしたところ、「その他」カテゴリのみが特異な反応を示していたためであり、これを除いて再計算すると関連性は確認できなかった。

このように個人的属性と行事評価との間の直接的な関連性は、年齢・農業従事・役員・構成員経験を除き、あまり明確でなかったが、年齢だけは3つの行事

評価項目のすべてと関連していた。

7. 行事評価を規定する要因の構造

(1) 行事評価と規定要因の関連性

図2は、個人的属性と規定要因 ($D \rightarrow E$)、規定要因と行事評価 ($E \rightarrow C$)、規定要因相互間 ($E \rightarrow E$) の有意な関連性を Cramer の V 係数で評価し、その結果を総括したものである。同図の矢印は有意水準10%を意味する。また、有意水準1%を満足する場合には太線で表示している (係数値は割愛)。

同図の右半分に規定要因 (E) と行事評価 (C) の関連性が示されている。「個人用件と集落行事との競合頻度」と「集落内のお付き合いの作法認識度」の2要因だけが、集落行事評価の3項目のいずれとも有意な関連性がみられた。しかも、2要因の関連の仕方は対照的であった。つまり、競合頻度が高いほど行事満足度は低くなり、煩わしきの感情と見直し要望は高くなるのに対して、作法認識度の場合は全くその逆であった。なお、行事に対する煩わしきはこれら2つの規定要因と特に関連が強かった。また、「休暇の自由度」は、集落行事に対する満足度に対してのみ、有意に関連していた。

(2) 規定要因と属性項目の関連性

以下では、6つの規定要因 (E グループ) ごとに属性項目 (D グループ) との関連を検討する。最初の3要因は、集落行事と個人的用件の競合に関するものであり、後の3要因は集落内のお付き合いの認識に関するものである。

1) 休暇の自由度

設問は、どの程度自由に休暇を取ることができるかを3段階で答えるものである。性別では女性の自由度

図 2．集落行事に対する評価とその規定要因の構造

が高い。職業では、恒常勤務者と自営業従事者で自由度が小さく、無職で大きい。年齢では30歳代と40歳代で「自由に休暇を取ることが困難である」と回答している。

2) 優先する用件

設問は、集落行事と個人的用件のどちらを優先するかを3カテゴリ（集落行事、どちらとも言えない、個人的用件）の中から選択するものである¹³⁾。役員・構成員（現、元）は集落行事を優先していた。

3) 集落行事と個人的用件の競合頻度

設問は、この1年間に仕事や家庭の用事と集落行事とが重なって困った頻度を4カテゴリ（3段階＋行事不参加のためわからない）で答えるものである。恒常勤務者の競合頻度は高く、逆に、無職・女性は低かった。年齢では、30歳代（69.3%）、40歳代（76.0%）と50歳代（85.2%）が年数回以上の頻度で競合していたが、30歳未満では大半（79.2%）が「ほとんどない」または「行事不参加のためわからない」と回答していた。

また、②優先する用件の場合と同様、役員・構成員（現、元）の競合頻度は高かった。前節で、役員および属性集団の構成員が集落行事に対して煩わしいと強く感じる傾向を指摘したが、役員・構成員（現、元）には立場上集落行事を優先せざるを得ない状況があり、そのことが競合頻度を高め、結果的に煩わしいという感情を生んでいることが推察される。

4) 付き合いの作法認識度

設問は、集落内でのお付き合いの作法や冠婚葬祭などの生活慣習の認識水準を4段階で答えるものである。農業従事者の認識水準は高かった。表6は付き合いの知識と年齢のクロス集計である。30歳未満（93.1%＝34.5%＋58.6%）と30歳代（84.6%＝69.2%＋15.4%）の大半は「付き合いの作法をよく知らない」と回答しているが、40歳代を境にして認知度が急に上

昇し、逆に「知っている」という回答が50歳代では82.8%（＝27.6%＋55.2%）、60歳～74歳では86.7%（＝30.0%＋56.7%）に達している。また、元役員・構成員の作法認識度は高かったが、現役員・構成員とは関連がなかった。

5) 親子の対話の頻度

設問は、親子間の対話の頻度を4カテゴリ（3段階の頻度＋相手がいない）で回答するものである。女性（性別）、家事および農業従事者（職業）、2世代以上の同居世帯（世帯類型）、大家族（家族員数）でそれぞれ親子の対話頻度が高かった。年齢階層とも関連していたが、関連の具体的な中身は、30歳未満で「対話が少ない」、60歳以上で「対話の相手がいない」が比較的多かったというものであった。

6) 集落内の世代間コミュニケーション

設問は、集落内の世代の異なる人（年の差10歳以上）とコミュニケーションがどの程度とれているかを答えるものである。現役員・構成員は、世代間コミュニケーションの水準が有意に高く、明確な関連性がみられたが、これは集落行事や集団活動への参加によると考えられる。一方、無職のコミュニケーション水準は低かった。

なお、親子の対話が家族構成、職業、性別と関連が深いのにに対して、集落内の世代間コミュニケーションでは上述のように役員経験と関連が見られるという相違点に、両項目の作用の違いが反映されていると理解できる。

(3) 規定要因相互の構造

図3はCramerのV係数に基づいて上記の規定要因の相互関連性を抽出したものである。なお、図中の＋印は正の関連、－印は負の関連を意味する。

1) 競合のメカニズム

集落行事と個人用件の競合に関する3要因（E1）の関連性から、休暇の自由度が小さく、個人的用件よ

表6. 付き合いの作法と年齢のクロス集計

年齢	集落内の付き合いの作法・生活慣習に対する認知度									
	知っている		だいたい把握している		あまりよく知らない		全く知らない		合 計	
	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
18～29歳	1	3.4	1	3.4	10	34.5	17	58.6	29	100
30歳代			2	15.4	9	69.2	2	15.4	13	100
40歳代	1	3.7	12	44.4	12	44.4	2	7.4	27	100
50歳代	8	27.6	16	55.2	5	17.2			29	100
60歳～74歳	9	30.0	17	56.7	3	10.0	1	3.3	30	100
75歳以上	8	33.3	10	41.7	3	12.5	3	12.5	24	100
合計	27	17.8	58	38.2	42	27.6	25	16.4	152	100

- Cramer の V 係数で有意水準 10% 以下
- 集落行事評価 3 項目のいずれとも関連あり
- 集落行事の満足度とのみ関連あり

図 3. 集落行事評価を規定する要因の構造

りも集落行事を優先する人がより強く競合に悩んでいること (①・②→③) が読みとれる。その結果、競合頻度が高まるほど、行事評価は低くなる (③→行事評価)。

2) 作法習得のメカニズム

集落内のお付き合い作法の認識に関する 3 要因 (E2) の関連性をみると、⑤親子の対話と⑥世代間のコミュニケーションとの間には明確な正の関連があり、しかも両者はともに④付き合いの作法と関連していた。つまり、⑤親子間および⑥集落内異世代間の交流

- Cramer の V 係数で有意水準 10% 以下
- 集落行事評価 3 項目のいずれとも関連あり
- 部分的に関連あり (具体的には注を参照)

図 4. 年齢・職業・家族形態の作用

水準が高いほど、④付き合いの作法認識度は高かった（⑤・⑥→④）。そして、上述のように作法認識度が高くなるほど、行事評価も高くなる（④→行事評価）。

3) 作法認識度と競合頻度の関係

集落内のお付き合いの作法をよく知っているほど、個人的要件よりも集落行事を優先する傾向（④→②）がみられ、その結果、競合頻度も高くなる（②→③）¹⁴⁾。上述のように、作法認識度は基本的（直接的）には行事評価を高めるように作用するが、優先要件と競合頻度を迂回して間接的に行事評価を低める作用もあわせ持つことがわかる（迂回のメカニズム）。

8. 個人的属性の作用と集落行事の展望

（1）年齢・職業・家族形態の作用

図4は、年齢階層、職業、家族形態などの個人的属性の主要な関連性（作用）を抽出したものである。恒常的勤務、自営業（職人を含む）などの職業に従事し、かつ働き盛りの30歳代から40歳代の住民は休暇の自由度が低く、それが集落行事と個人的要件の競合頻度を高め、行事評価を低下させている。一方、農業や家事に従事し、複数世代・大家族と同居している住民は、家庭内での対話を通じて集落内の付き合い作法認識度が向上し、これにより行事評価が高まる。また、加齢とともに作法認識度も高まり、行事評価を高めている。

ところで、7節（2）項あるいは図4に示したように、年齢は4つの規定項目と強く関連していた¹⁵⁾。このため、前掲表4に示したように、結果的に年齢のみが集落行事評価の3項目のいずれとも強く関連していた。このように年齢と集落行事評価が深く関連している理由は、それ（加齢）が、基本的に「集落行事への積年の関与を通じて、居住者が集落固有の生活規範（の一部分）を次第に習得してゆく過程」、つまり「社会化の過程」に対応しているためであると考えられる。

一方、職業は個人の生活のリズム（生活時間の構造）を強く規定している。図4は、現代的な生活のリズムが、農耕時代にその起源を持つ集落行事・慣習のリズムと整合しなくなったことが「競合」の根本的な理由であることを示している。そして、年齢階層と職業との間には強い関連があり（クロス集計表は割愛）、恒常的勤務、あるいは自営・職人層は、30歳代～40歳代に多く、農業への従事は50歳代以上に多い。

（2）役員・構成員経験の作用

図5は、自治会の役員や各種下部組織の構成員の経験と規定要因との関連を抽出したものである。同図の右半分を見ると、住民は役員・構成員の経験を通じて世代間のコミュニケーションを獲得し、結果的に付き合いの作法を習得している¹⁶⁾。また、過去および現在の役員・構成員の経験者のシェア（対18歳以上全住民）

図5. 役員・構成員経験の作用

はそれぞれ42%と47%であり、18歳以上の全住民に対する経験者（現在または過去）のシェアは70%に達している。つまり、順繰りに役員や各種下部組織の構成員を経験することが、生活行事・慣習の獲得を促進させる装置として機能していることがうかがえる。

反面、既に指摘したように、役員・構成員の経験は競合頻度を高める要因としても作用している（図の左半分）。

（3）属性変化を見込んだ集落行事の将来展望

現在の要因構造をそのまま仮定した場合、予想される属性の変化から集落行事のあり方を考察したい。

兼業化、とくに恒常的勤務への従事がさらに増加する場合には、集落行事と個人的用件の競合が増大して、集落行事への不満（煩わしさ）が高まるであろう。また、核家族化が進むか、あるいは現在以上に農業が衰退し、少数の担い手だけが農業に関与して他の住民が農業に全く従事しないような状況にいたれば、集落内のお付き合いの作法認識度が低下する。このため住民は集落行事に内在する本来の「価値」に気付くことなく、行事に対する不満だけを募らせるであろう。

一方、行事の担い手である役員や属性集団の構成員の負担を減少させることが、競合頻度を押さえ、行事評価を改善する上で重要である。しかし、行事や慣習を単純に廃止あるいは省略化するならば、確かに競合は緩和されるが、付き合いの作法習得が阻害されてかえって行事自体の満足度を一層低下させてしまうことにもなりかねない。よって、行事への参加水準を維持しながら、関係者の負担を軽減するきめ細かい見直しが必要である。

集落行事や生活慣習を見直す場合、もっとも競合頻度が高い30歳代から40歳代への配慮は特に重要である。恒常的勤務に従事し、仕事と家庭において時間的な自由度がほとんどないにも関わらず、事実上、担い手（役員・属性集団の担い手）として行事に動員されていて、行事に対する不満が蓄積されている。さらに重要なことは、この年齢層では、「行事への主体的参加を通じてお付き合いの作法認識が大きく向上するが、それが個人の集落行事に対する優先度を高め、さらに競合頻度を高めて、結果的に行事への不満を一層拡大させる」という迂回メカニズムがもっとも機能しやすいことである。彼らの不満を如何に解消できるかが行事見直しの成否をきめるであろう。30歳未満の階層は、集落行事に未だ十分関与していない。すぐ上の世代の窮状をつぶさに見れば、おそらく参加自体を拒否するであろう。彼らを巻き込むためにも、行事・慣

習の早急かつ適切な見直しが必要とされているのである。

9. おわりに

本稿では、悉皆アンケート調査の統計分析により、集落行事に対する満足度が定住意向を規定する重要な要因であることを明らかにした。また、項目間のクロス集計から得られる属性相関係数を用いて集落行事評価を規定する要因の構造を明らかにした。

世帯調査ではなく個人調査を採用したこと、個人属性と定住意向とを媒介する規定要因を新たに導入したこと等によって、個人属性と行事評価の単純な対応関係からは描ききれない2つのメカニズムを抽出することができた。「競合のメカニズム」は集落行事に対する不満を生み出すメカニズムであり、それは、都市化・兼業化に伴って、生業および生活リズムと伝統的な行事・慣習との間に生じた不整合に起因している。一方、「作法習得のメカニズム」は家庭内および集落内の世代間コミュニケーションを通じて定住者としてのアイデンティティを獲得してゆくメカニズムであり、大家族型の家族形態のもとで農業、家事・育児を生業とした生活と地域活動（役員・属性集団構成員）への参加により集落行事・生活慣習を継承する社会的装置である。そして、今後予想される状況は、前者の一層の強化と後者の機能不全である。

本稿の分析結果は、農村地域の定住意向を向上させる上で、集落行事や生活慣習を見直し、行事に対する満足度を高めることが有効であることを示唆している。かかる見直しは、住民自身が主体的に取り組む以外に方策はない。このことは、住民主体による集落社会計画の必要性を意味している。しかしながら、集落行事・生活慣習の見直しは住民自身の問題であり、かつ、解決の手段も住民自身が保持しているにも関わらず、住民間のデリケートな感情の対立をはらむが故に自治会等が内側から主体的に取り組みにくいという性格を持つ。よって、集落社会計画の策定にあたっては、住民各位の意向を客観的に処理し、的確な助言を提供する外部支援の存在が不可欠である。

注 1) たとえば、二宮哲雄・中藤康俊・橋本和幸編著、「混住化社会とコミュニティ」、お茶の水書房、1985、橋本和幸他共著、定住の社会学的研究、多賀出版、1988がある。

2) 西村雄郎「住民意識と町内会活動」、前掲二宮他編著（1985）、pp. 239-265。

3) 三上勝也「家意識の諸相と定住」、前掲橋本他共著

- (1988), pp. 369-408.
- 4) 石原多賀子「定住指向の諸類型と生活観」, 前掲橋本他共著 (1988), pp. 409-426.
 - 5) たとえば, 斉藤吉雄編著, 「コミュニティ再編成の研究-村落移転の実証分析-」, pp. 404-425 (五十嵐之雄稿), pp. 471-474 (横井修一稿), お茶の水書房, 1979, 杉山一郎他共著, 「地域政策と山村コミュニティ」, pp. 298-309 (杉山稿), pp. 372-378 (橋本和幸稿), 多賀出版, 1984.
 - 6) 永住意向と呼ばれる場合もあるが, 要するに, 「現在, 居住している地域に引き続き居住したいか否か」あるいは, 定住を望む度合いを問うものである.
 - 7) 経済企画庁が実施している新国民生活指標では, 8つの活動領域 (住む, 費やす, 働く, 育てる, 癒す, 遊ぶ, 学ぶ, 交わる) の152指標によって「生活の質」を総合的かつ客観的に把握している. 定住意向は, このような客観的な要素に地域への愛着・帰属意識などの主観的な要素が加わった総合的かつ主観的な評価であると考えられる.
 - 8) 全戸または全農家の加入を原則とする地域組織 (自治会, 里づくり協議会, 農会, 土地改良区, 水利組合) の役員, 属性集団 (消防団, 婦人会, 老人会) の構成員, 行政委員 (民生, 青少年, 農業, 交通安全各委員) の経験. 様々な集落行事の実質的な担い手に相当する. なお, 元役員・構成員は, 部分的に現役員・構成員と重複する.
 - 9) 調査方法については, 細心の注意が必要である. 先行事例での経験をふまえて本事例の調査方法を工夫したが, それについては機会を改めて報告する.
 - 10) 安田三郎, 海野道郎著, 「改訂第2版 社会統計学」, 丸善, 1977, pp. 54-55.
 - 11) ステップワイズ法による変数選択を行った. 変数投入基準はF値確率5%, 変数除去基準は同10%である.
 - 12) 分析2で用いる項目 (特に個人的属性項目はか) の中には, 順序性のない項目やカテゴリも含まれるため, 純粋属性変数間の相関係数であるCramerのV係数を用いて関連の強度を計測した.
 - 13) 調査票では5段階評価であったが, カテゴリを統合して3段階にした.
 - 14) ④作法認知度と③競合頻度を直接クロス集計しても両者の間に正の関連が読みとれる.
 - 15) 図4を因果モデル的に解釈することにより, 年齢→媒介項目→集落行事評価の関係を整理しておこう. 図4で, 30歳代~40歳代の世代グループと集落行事の評価をつなぐルートは3つある. 第1ルートは, 30歳代~40歳代の世代グループ→E①休暇の自由度→E③競合頻度→集落行事評価である. この間の関連性は, $(-) \times (-) \times (-) = (-)$ であり, このグループの集落行事に対する評価は低くなる. 同様に第2ルートは, 30歳代~40歳代の世代グループ→E③競合頻度→集落行事評価であり, この間の関連性は $(+) \times (-) = (-)$ である. 更に, 第3ルートは, 30歳代~40歳代の世代グループ→E⑤親子の対話→E④お付き合いの作法認知度→集落行事評価であるが, この場合には, $(-) \times (+) \times (+) = (-)$ となり, いずれのルートも集落行事に対する評価を低減させる方向に作用している. 一方, 50歳代以上のグループでは, E④お付き合いの作法認知度を介して集落行事評価に至るルートがあるが, この場合には $(+) \times (+) = (+)$ となり, 集落行事評価は高くなる.
 - 16) 現役員・構成員の中心年齢階層は, 30歳代, 40歳代, 50歳代が中心であり, 元役員・構成員は40歳代, 50歳代, 60歳代~74歳である. 両者には年齢的に1階層のずれがある.

<謝辞>

調査の機会を与えていただいた地元自治会長横尾暢夫氏, 前会長藤田寛之氏, 同地区里づくり協議会役員各位, ご協力をいただいた神戸市北農政事務所沼田登貴夫氏, 有益なコメントをいただいたレフリーの先生方ならびに佐藤豊信岡山大学教授に紙面を借りてお礼申し上げます.

(受理日: 2000年12月16日)